

写真を活用した絵画表現の考察

*安彦文平

要旨

本実践研究は、2007年から2021年まで合計14年間に行った、教科専門科目「図工」に基づいている。その中の単元授業「写真を活用した絵画表現」を理論化する。とくに実践のあり方とその成果について考察する。

「写真の活用」という語句が示す意味内容に関して、先行研究は主題表現の方法論としてメディア媒体である、写真を新たに活用したことにある。本題材実践は描写技術の習得を目指している点で、それらと根本的に異なる。ただし技術の習得が一定レベルに到達した、学生が自主的に主題表現を行える境地に入れる、余地を残しておいた。その点がユニークだといえよう。

題材実践は2クラスそれぞれ49名と45名の学生が対象となり、2020年と2021年の両年度にまたがって実施した。さらに描写法をめぐる芸術学的概念で分析した点に学的な拠り所が求められよう。かくて教育効果が客観的に検証された。

Key words： 専門教科「図工」、主題表現、描写技術、学的な拠り所、描写法をめぐる芸術学的概念

はじめに

本実践研究は、2007年から2021年まで合計14年間にわたって行った、教科専門科目「図工」に基づいている。その中の単元授業「写真を活用した絵画表現」を理論化する。とくに実践のあり方とその成果について考察する。本稿で取り上げる実践は、2020年度と2021年度に実施したものである。

授業の概要は以下の通りである。対象者は初等教育教員養成課程1年生で、制作時間は90分を4回当てる。

1. 写実表現を苦手とする者に、写真を活用した鉛筆画実践を試みる。
2. 準備段階として線の強弱や密度による表情の変化、10段階の明暗グラデーションを事前に体験する。
3. 本絵制作ではF4サイズの支持体（画用紙）に写真を貼り、その構図法及び透視図的空間構成法の要請に触発された形で、画面の余白に自らの想像世界を展開する。
4. 描写力と想像力の育成に力点を置いた絵画制作に

よって、造形表現力を高める。

次に本授業の到達目標を掲げる。

- ・鉛筆画ワークシート演習（図1）では、デッサンの基本的な能力を身につける。
- ・簡単な透視図法を理解する。
- ・写真に基づいて想像力を働かせ、独自の絵画世界を作りあげる。
- ・鉛筆の技法はもとよりそれ以外の素材（ティッシュ等）を活用して、創造的に描くことができる。

1. 先行研究について

写真を活用した先行研究に、主題表現（表したいことを表す）の方法論の一つとしてメディア媒体である写真を新たに位置づけ、広く人間と現実を撮影的に見つめさせ、それによって自ら表したいことを映像化させようとする実践がある。（相田隆司「生徒の周辺を写真映像で作品化させる試み」『美術教育学19号、1998年』所収）。それに対して、本実践研究は写真を利用

* 宮城教育大学 教科内容学域 芸術・身体科学部門（絵画）

して、描写技術の習得を志向しようとしている点で、趣旨が全く異なる。ただし表現技術が一定レベルに達した学生が順次、主題表現の世界にも入れるような、題材としての余地も確保してある。

また同氏による実践に、自ら制作した人形や市販のキャラクターを各自の定めた場所に置き、写真映像に収めるという活動がある。たとえば不法駐輪の場面に配置することで、不道徳心を糾弾する心情を表す。学習塾の前に配して競争社会の低年齢化を皮肉ることで、現代社会を覆う負の抒情を表そうとする。

それらは、人形やキャラクターが情景の脚色役となったり、心情のアクセントづけに用いられたりして、独自の表現効果を発揮している。その点にユニークさが認められるが、題材実践の基本的なあり方としては、映像による主題表現であることに変わりはない(相田隆司「私たちのありようから出発することをめぐって」『美術教育学26号、2005年』所収)。それは人間や現実に対する望ましい態度を覗んだ、人生理解・価値観的な表現に他ならない。

小論は小学校教員をめざす学生の造形表現力を育成することを主眼とする。これと趣旨を同じくするものに、「写真をもとにポスターの構図を考える」という実践がある(金子宜正「写真を用いた構図づくりについて」『芸術文化4号、1999年』所収)。自ら撮影してきた写真の中から、構図のイメージーションを自然発生的に得るという活動は、教育学部学生をポスター制作に対するストレス(強迫観念)から解放することにつながる。

相田氏のように、写真を独立した芸術分野として扱うのではなく、金子実践は新たな見方を提供する道具として規定するのである。造形活動はなべて、学校教育のねらいやカリキュラムの範疇にあることが望ましいが、教科教育研究的なあり方を踏まえてそれを実施した点で、本稿にとって先駆的なものと高く評価したい。

2. 評価基準と教育成果

制作のポイントを覗んだ、評価基準のあり方について述べてみよう。

①デッサンの基本に取り組む→ワークシート演習における指示内容に対して、適切に応えたかどうか。

②写真図版の消失点を見つける→それとの関係で写真の外部平面における陰影法や、奥行き関係と齟齬なく正しく表せているかどうか。

③透視図法に基づき、写真図版の外側にあるべき情景を新たに発想しながら、両者における明暗の諧調を合わせる→写真の外部世界の構築にどのような発想法で臨み、脈絡関係の良さやおもしろさを追究したのかどうか。

本授業の独自性とその教育成果は、以下のように特徴づけることができる。彼らが写真図版と、その外部表現の一体感を目指す中で、生徒が実感したのは。

- ・画面の一部に写真図版を貼る→誰にとってもその後における、制作の進め方がわかりやすい。一目瞭然である。
- ・写真図版の中に消失点がある→それに倣いながら外部平面に、一点透視図法の世界を展開できる。
- ・写真図版は作品としてすでに完成されている→写真図版と外部平面に広がるべき新たな情景を比べて、明暗の諧調の統一性を追究する。さらに両者の脈絡を踏まえて、主題を新たに発想し造形表現することができる。

3. 事後アンケートの分析結果

本章では、2020年度と2021年度の両年にわたって実施した、事後アンケートについて分析した内容を示す。

(1) 事後アンケート分析－図工C 2020年

49件の回答

所属(コース) 49件の回答

子ども文化コース・教育心理学コース・社会コース・その他 18.4%・42.9%・34.7%

子ども文化コース 9

教育心理学コース 17

社会コース 21

その他 2

①写真を活用した絵画制作はいかがでしたか? 49件の回答

よくできた・できなかった30.6%・69.4%

よくできた 34

できなかった 15

写真を活用した絵画表現の考察

②遠近法（1点透視図法）を利用して描けましたか？

49件の回答

利用して描けた・利用して描けなかった 98%

利用して描けた 48

利用して描けなかった 1

③写真が無かったら描けなかったかもしれませんか？

49件の回答

写真を活用したから描けた・

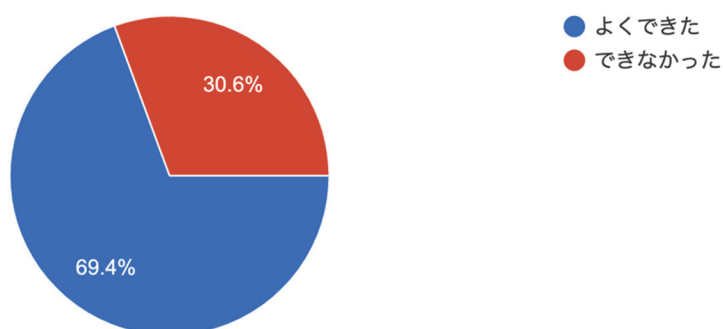
写真が無くても描けた 98%

写真を活用したから描けた 48

写真が無くても描けた 1

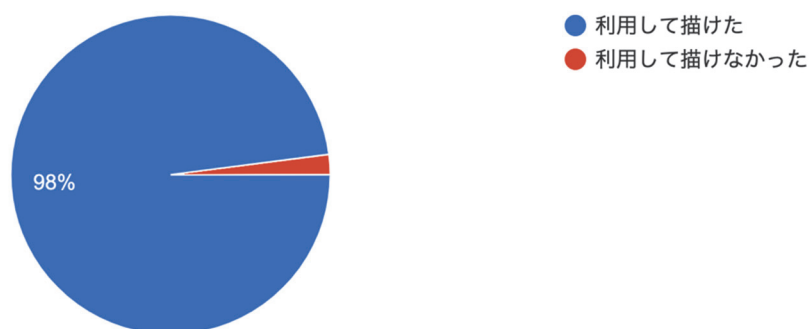
写真を活用した絵画制作はいかがでしたか？

49件の回答



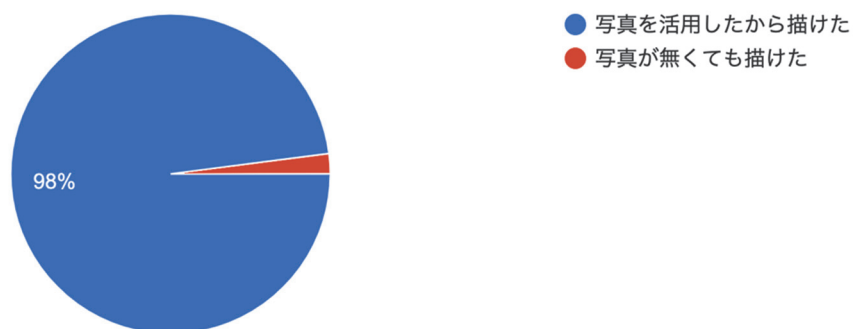
遠近法（1点透視図法）を利用して描けましたか？

49件の回答



写真が無かったら描けなかったかもしれませんか？

49件の回答



④写真の内容から想像を働かせて描き広げる事ができ

ましたか？48件の回答

想像して描けた・

想像は難しくて描けなかった 22.9%・77.1%

想像して描けた 37

想像は難しくて描けなかった 11

描く上で役立った・

描く上で役に立たなかった 100%

描く上で役立った 49

描く上で役に立たなかった 0

⑤事前のワークシートは役立ちましたか？(線の強弱

や明度の幅などの訓練) 49件の回答

⑥以前より絵を描く自信ができましたか？49件の回答

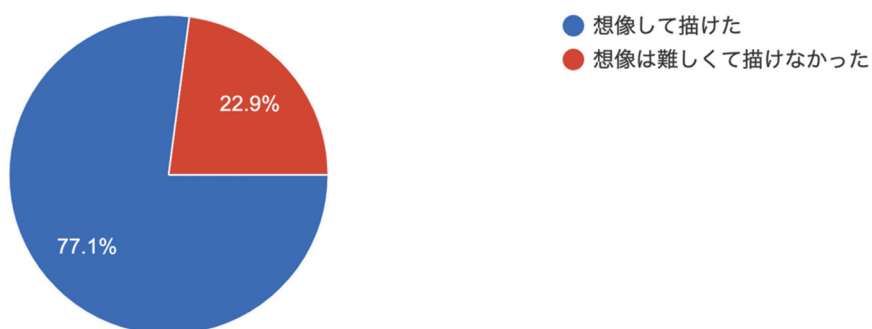
ついた・そうともいえない 28.6%・71.4%

ついた 35

そうともいえない 14

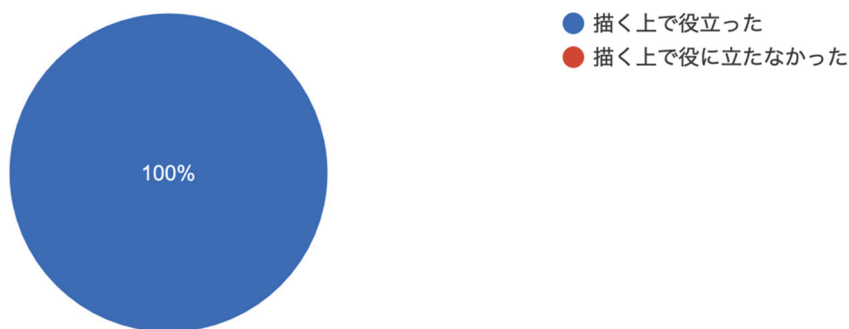
写真の内容から想像を働かせて描き広げる事ができましたか？

48件の回答



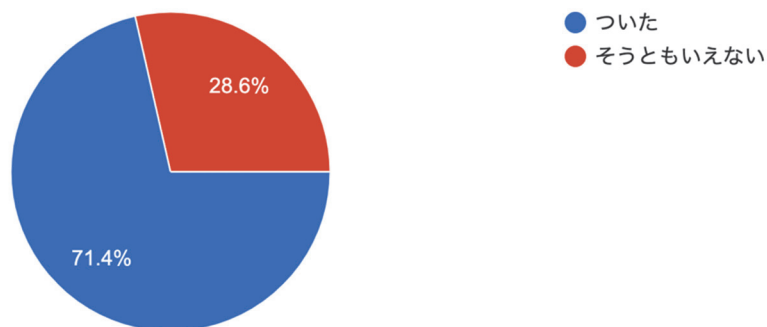
事前のワークシートは役立ちましたか？(線の強弱や明度の幅などの訓練)

49件の回答



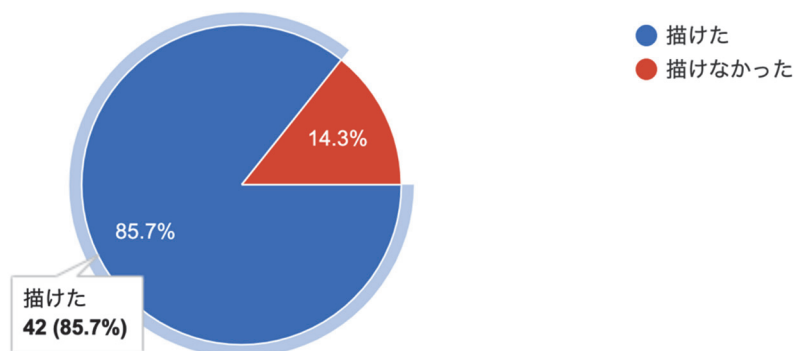
以前より絵を描く自信ができましたか？

49件の回答



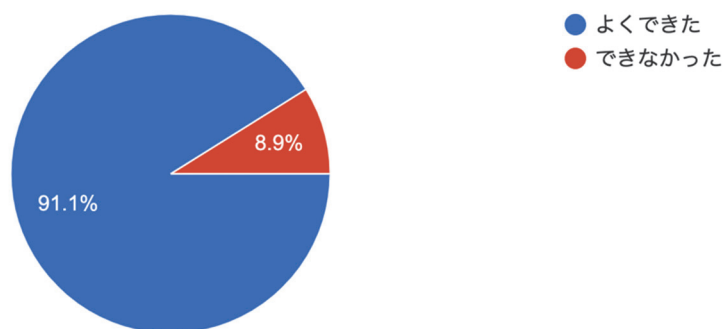
絵を描く時に、光や影を意識して描きましたか？

49件の回答



写真を活用した絵画制作はいかがでしたか？

45件の回答



⑦絵を描く時に、光や影を意識して描きましたか？49
件の回答

描けた・描けなかった 14.3%・85.7%

描けた 42

描けなかった 7

よくできた 41

できなかった 4

②遠近法（1点透視図法）を利用して描きましたか？

45件の回答

利用して描けた91.1%・利用して描けなかった8.9%

利用して描けた 41

利用して描けなかった 4

(2) 事後のアンケートの分析－図工C 2021年

45件の回答

所属（コース）45件の回答

子ども文化コース22.2%・教育心理学コース33.3%

・社会コース44.4%

子ども文化コース 10

教育心理学コース 15

社会コース 20

その他 0

③写真が無かったら描けなかったかもしれませんか？

45件の回答

写真を活用したから描けた88.9%・写真が無くても

描けた11.1%

写真を活用したから描けた 40

写真が無くても描けた 5

①写真を活用した絵画制作はいかがでしたか？45
件の回答

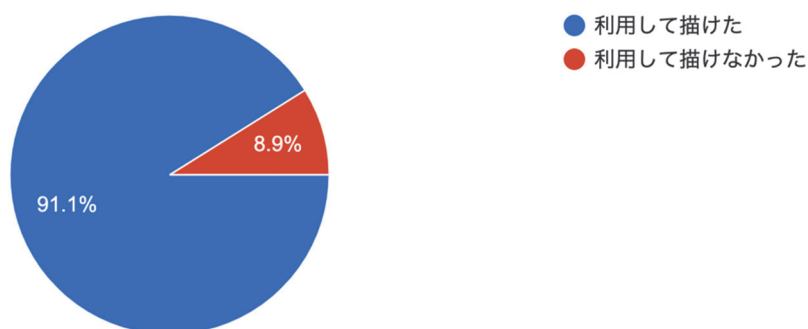
よくできた91.1%・できなかった 8.9%

④写真の内容から想像を働かせて、描き広げる事が
できましたか？45件の回答

想像して描けた82.2%・想像は難しく描けなかつ

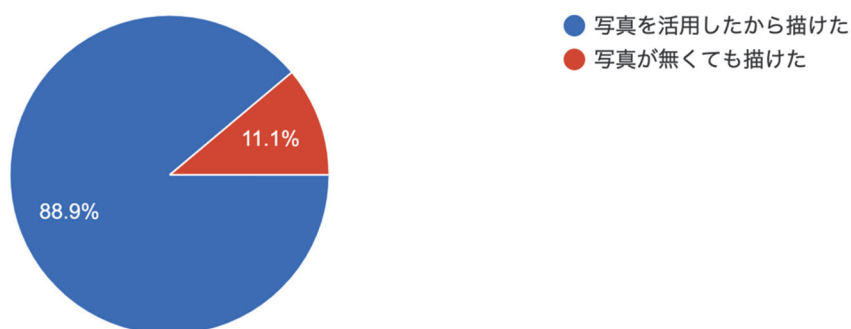
遠近法（1点透視図法）を利用して描けましたか？

45件の回答



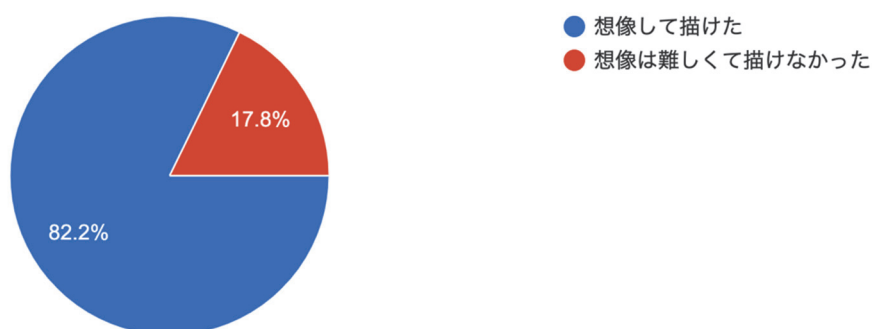
写真が無かったら描けなかったかもしれませんか？

45件の回答



写真の内容から想像を働かせて描き広げる事ができましたか？

45件の回答



た17.8%

想像して描けた 37
想像は難しく描けなかった 8

描く上で役立った 45
描く上で役に立たなかった 0

⑤事前のワークシートは役立ちましたか？（線の強弱や明度の幅などの訓練）45件の回答

描く上で役立った100%・描く上で役に立たなかった0%

⑥以前より絵を描く自信ができましたか？45件の回答

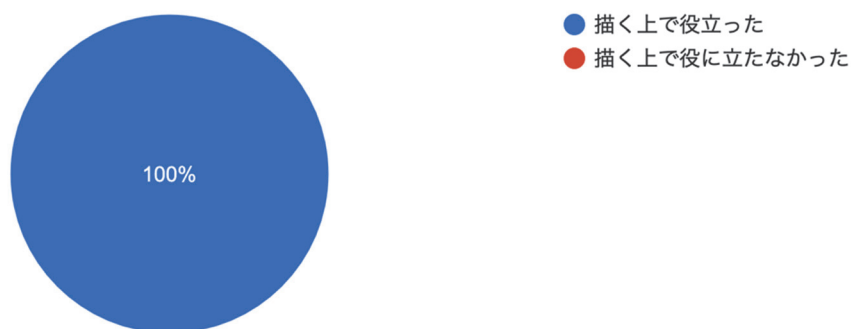
ついた・66.7%・そうともいえない33.3%

ついた 30

そうともいえない 15

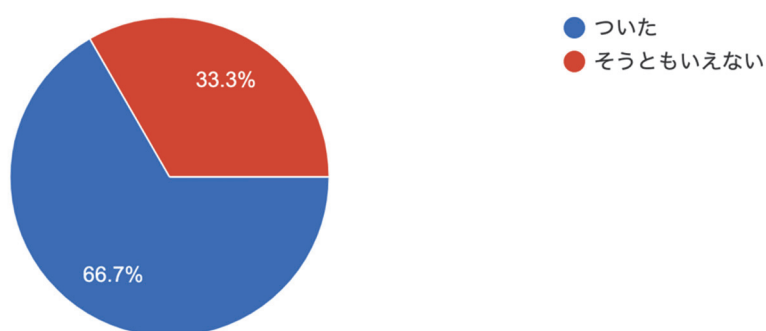
事前のワークシートは役立ちましたか？（線の強弱や明度の幅などの訓練）

45件の回答



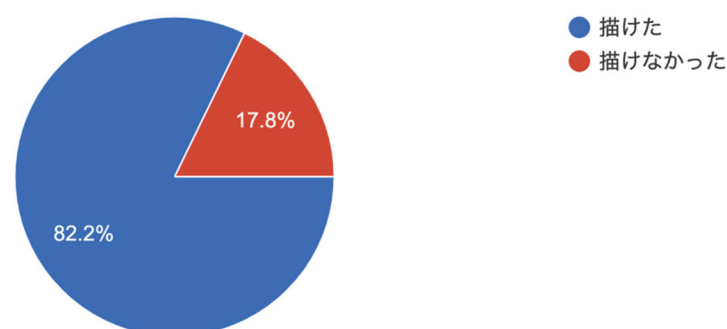
以前より絵を描く自信がつけましたか？

45件の回答



絵を描く時に、光や影を意識して描きましたか？

45件の回答



⑦絵を描く時に、光や影を意識して描きましたか？45

件の回答

描けた82.2%・描けなかった17.8%

描けた 37

描けなかった 8

4. アンケート分析結果の概括

(1) 第1質問「写真を活用した絵画制作はいかがでしたか？」

2020年度と2021年度では、それぞれ「できなかった」が30.6%に対して、8.9%であった。この差が3倍にも及び、やや大きいのが気になる。クラス・メン

パーの構成は兩年度ともに、子ども文化コース・教育心理学コース・社会コース・その他から構成されて同一で、変わりはない。懸隔の理由は、たまたまクラス化された学習集団の資質に、求められるかもしれない。今のところそれ以外は思いつかない。

(2) 第2質問「遠近法(1点透視図法)を利用して描けましたか？」

本題材が透視図法と明暗法の習得を二大契機とする描写力育成法であるため、「利用して描けた」との回答は、趣旨が学生全体に伝達できたことの証左となっている。2020年度98.0%、2021は91.1%であった。

「ほとんどが写真の延長を描いていただけになってしまったけど、建物の延長線を人工物らしく狂いのない真っ直ぐな線と、間隔で描けたのは良かったと思う」

(3) 第3質問「写真が無かったら描けなかったかもしれませんか？」

この問いかけは、本題材実践の存在意義を根本的に規定する有効性が、まさに問われるような内容である。「写真が無くても描けた」を選ぶ学生、言い換えれば教育効果を真っ向から否定する者は2020年度では2.0%、2021年度では11.1%であった。この数値はとくに前者が驚くほど破格の評価であり、後者がやや低いように思われる。かくて現実的な有効性としては両者の中間を採って、95%と見なすのが妥当であろう。

(4) 第4質問「写真の内容から想像を働かせて、描き広げる事ができましたか？」

この問いかけは、本題材実践に固有な「のびしろ」に、相当する活動がなされたのか否か、の確認である。本題材の趣旨は元来、描写技術の習得にあるが、それを行えた学生が次の段階である主題表現の境地にも、到達できたことを物語っている。「のびしろ」的活動の要請に応えた者が2020年度では77.1%、2021年度82.2%に達した。その事実からも明らかであるが、本題材の複合的な意図が約8割の学生によって認識されたのである。

「木や建物の奥に海があるという設定です。砂浜や波を描くのが難しかったのですが、恐らくできましたと思います」

「洋館の中に和室を描いたので、不思議な世界ができたのではないかと思います」

「もう少し時間をかけて細かい点まで私の想像する世界観を出したかったが、右側のつる草が壊れた壁に巻き付いている部分は、細かい線を重ねることでうまくできた。きれいな廊下の一部分だけを老朽化させ、時間の流れが速まったようなイメージ。つる草を初めて描いたが、思っていた通りにできた」

「工夫したのは単純に写真から繋げて描くのではなく、新たな世界をイメージしているるところから、ある一つの場所を覗いているような作品にしたことです。最初に描こうと思ったものよりもっとよいものにしようと思い、いろんな情報を描き足していくと、どんどん楽しくいい作品になっていった気がします」

「絵の中の世界を小さい世界にして、シルバニアファミリーのようなものを手で掴んでいるように見せているミニチュア作品は、自分では絶対に思いつかないなあと思った」

「写真の建物をミニチュアに見立てて小さな人形を足したり、対比的に人間の手を大きく描いていたりして、想像力を働かせてそれを描ける画力も素晴らしいなと思った」

「光の入りを統一させることと、現実世界とフィクションな世界を融合させることに意識を向けた。難しかったけど、とても楽しく描けたと思う」

(5) 第5質問「事前のワークシートは役立ちましたか?(線の強弱や明度の幅などの訓練)」

「役立った」と回答した学生は2020年度並びに、2021年度ともに100.0%に達した。デッサンの基本的な能力は本題材の端緒であるが、それを身に付けてから、段階を踏んで本題材の核心に携わることの、教育課程的な有効性が、証明された形である。

(6) 第6質問「以前より絵を描く自信ができましたか？」

「ついた」と回答した学生は2020年度は71.4%、2021年度は66.7%に留まった。やや期待外れに終わったが、多様な絵画様式の中の一つとして写実的描法を相対化し、今回はその一様式を集中的に学んだとの意識が、その根底にあったからと思われる。彼らが表現方法の多様さを認識していることの証左となろう。

(7) 第7質問「絵を描く時に、光や影を意識して描けましたか？」

「描けた」と答えた学生が2020年度は85.7%、2021年度は82.2%に達している。本題材実践で陰影法を確認しながら、具体的に造形表現ができた事実を裏付けている。

「壁と窓を写真の、光の当たり具合や影になる部分を、鉛筆の濃さを変えて工夫しました」

「光の影がどこにできるかを意識しながら描くことができた」

「写真との繋がりを大事にしました。特に天井は違和感のないように影などに注意しながら描きました。また、窓からの光があることを想定し、カーテンに明暗をつけるところに力を入れました」

「写真の中に現れている実際の光と、影を鉛筆を使って表現するのが難しかった」

「光の方向を考えて影をつけることができた。明暗をつけて奥行きを出すように工夫した」

「今回の作品で意識したのは、床の光の当たり方とリアルな絵を描くことである。光の当たり方を気にして絵を描くことは、このような機会がないとなかなかできないことなので、窓がどこにあってどこが明るくなるかな…。と意識しながら、グラデーションを利用してみた」

「太陽の位置を明確にしたので影を考えながら描けた」

「木の影をつける際に、他の物体とは異なり葉と葉には間隙があるため、他の影より薄く描いた。その際に、鉛筆の上部を持ち、鉛筆を傾けて優しく描くことで、やわらかい雰囲気陰影を表すことができました」

「窓から差し込む光が壁に映っている様子を、自分なりにイメージして描きました」

まとめ

「写真の活用」という語句が示す意味内容に関して、主要な先行研究は主題表現（表したいことを表す）の方法論としてメディア媒体である、写真を新たに活用したこと、と認識している。しかし本題材実践は造形表現力を度外視して、主題表現をいきなり行わせる方向は採らない。

新しい媒体として写真に依存するのではなく、学校教育の目的とカリキュラムに則った主題表現を成就さ

せるため、その基本としてまず描写技術の習得を目指すのである。ちなみに主題表現の端緒は構図や空間構成を発想することであるが、とくに前者の手助けとして写真を活用する先行研究がある。それは本研究の学校教育的な趣旨と意義を正当なものとして位置付けてくれた。

学生の中には、造形表現力の基礎としての描写技術を、一定レベル習得した者も多い。そのため彼らが本題材で身に付けた描写力を発揮して、自主的に主題表現を行える境地に、入れる余地を残しておいた。その点が本題材のユニークさだといえよう。だからこそ毎年、同一題材を行っているにも拘わらず、興味・関心を失わずに取り組む学生が多いに違いない。

題材実践は2クラスそれぞれ49名と45名の学生が対象となり、2020年と2021年の両年度にまたがって実施した。そこで得たデータが本研究の拠り所となっている。ここでは実践的研究が保証されるために、数量的条件に応えたことになる。

さらに描写法をめぐる芸術学的概念でデータを分析した点も、学的な拠り所が求められよう。かくて本題材の有効性が客観的に検証されたのである。

(令和3年9月30日受理)

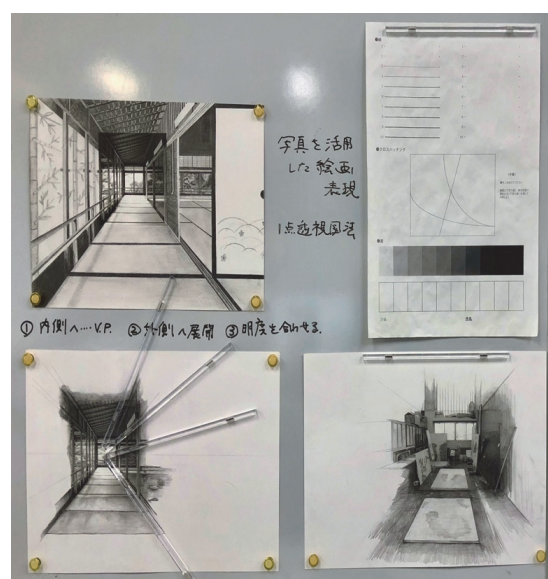


図1 ワークシートと進め方

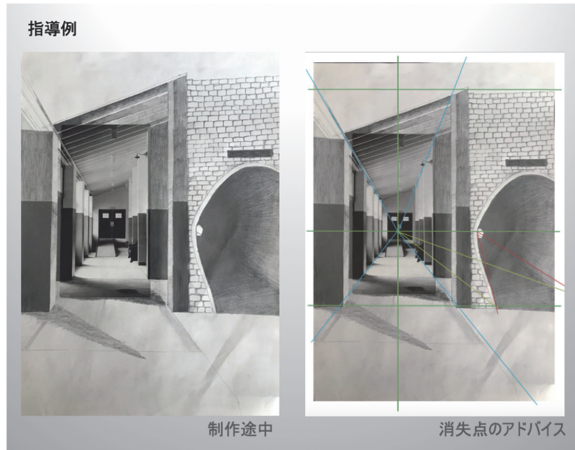


図 2 参考資料

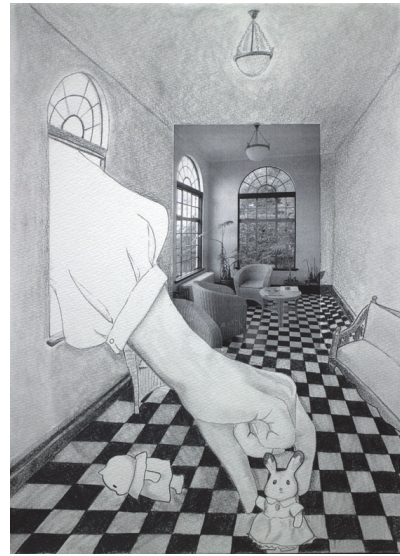


図 5 学生作品



図 3 学生作品

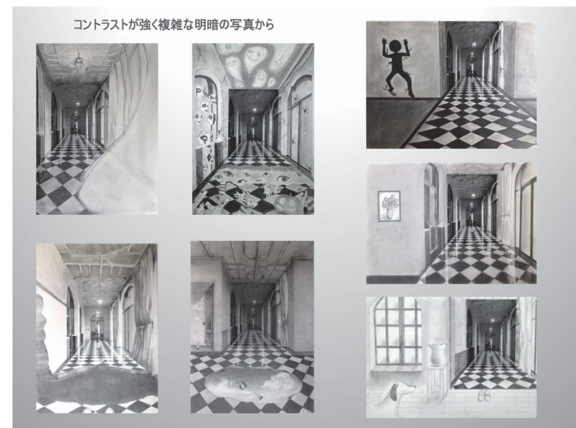


図 6 学生作品



図 4 学生作品



図 7 学生作品

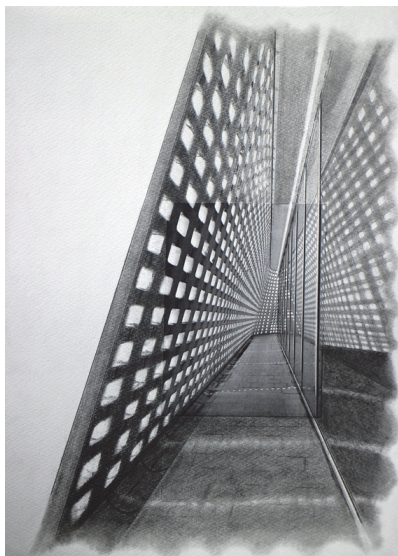


図 8 学生作品

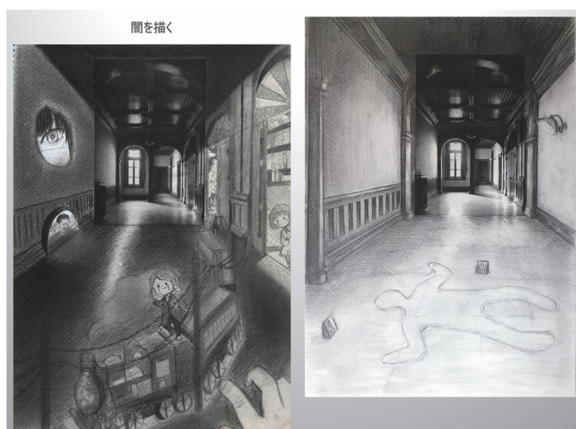


図 9 学生作品



図 10 学生作品

A Study on Painting Expression Utilizing Photographs

ABIKO Fumihira

Abstract

This practical study is based on the curriculum subject “zuko” (drawing and manual arts) run for a total of 14 years from 2007 to 2021, and theorizes on part of that subject, the module “Painting expression utilizing photographs,” paying particular attention to the conduct of lessons, and the resulting outcomes.

According to previous studies, the meaning of the phrase “utilization of photographs” lies in the new use of the medium of photography as a methodology for thematic expression. In that its aim is acquisition of a reproduction technology, this implementation of thematic material differs fundamentally from these previous studies. Moreover, room was left for students who reached a certain level of skill to move to the next phase of carrying out their own, autonomous thematic expression. This could be described as unique.

This thematic expression practice involved two classes of 49 and 45 students respectively, and was conducted over two years, 2020 and 2021. Further scholarly evidence can likely be sought in the fact that analysis was conducted using artistic concepts around the method of depiction. Thus the educational effect was verified.

Key words : curriculum subject “zuko” (drawing and manual arts),
thematic expression,
reproduction technology,
scholarly evidence,
artistic concepts around the method of depiction